

津久井やまゆり園事件を考え続ける会シンポジウム 2024

## 津久井やまゆり園を出た人たちのその後

### ～地域生活は実現できたのか～

ユニコムプラザさがみはらセミナールーム 1

2024.07.27(土)13:30～16:30

### ～津久井やまゆり園元職員による

### 障害者無差別殺傷事件を忘れないために～

津久井やまゆり園障害者無差別殺傷事件、被害者、尾野一矢、父 尾野剛志

この資料は、2016年（平成28年）07月26日に起きた相模原市緑区、障害者支援施設、津久井やまゆり園での元職員による障害者無差別殺傷事件を被害者家族の一人として、事件後から現在まで、マスコミを通して発言してきたものを文章にして講演会等において参考資料として、参加者の皆様方に配布しています。

2020年（令和2年）3月16日、この事件の裁判で植松被告に対して死刑判決が出た、ご遺族、私達被害者家族の願い通りの判決であったが、確定ではない。3月30日迄植松被告が控訴しなければ、3月31日に死刑が確定される、私達は30日まで祈る思いで見守っていた。31日、死刑確定の報道がなされ、胸をなで下ろした。しかし、これで事件が全て解決したわけではない、私達にとって一区切りがついただけである。一部のマスコミ関係者、ジャーナリストの方々の中には、植松死刑囚は控訴をして、事件の概要を知るべきだと言う人たちが居た事である。私達、ご遺族や被害者家族は、これ以上辛い気持ちを長引かせることは望んで居ないし、仮に、控訴して高裁で審理されても彼が語ることはないと思うのでそっとしておいてほしいと言うのが本音である。これからこの事件の風化を防ぐ為、関係団体や、いろんな方々と検証し、植松死刑囚の凶行について分析し、内外に知らせなければならない、今後このような事件が起きないように、講演等で、働きかけたい。

2022年（令和4年）春、植松死刑囚が、横浜地裁に再審請求を申請した、何を考えているのだろうか？再審請求は、死刑囚に有利な証拠等がなければ受理されないことは解っているはずなのに、関係者の間では、受理されないだろうと考えていますが、植松死刑囚は、再審請求が受理されて、死刑執行を延ばすような考えだと思います。昨年4月、横浜地検の判断は「不受理」をしたが、植松死刑囚側についた弁護団が即時抗告をした。

## 1、事件当時の私の記憶

2016年（平成28年）7月26日、AM5:30頃、友人からの電話で起こされ、テレビを付けて愕然とする。「津久井やまゆり園元職員による殺傷事件、15名死亡」のテロップが流れていた、AM7:30、やまゆり園に到着したが、園内は収集がつかないほどの状態だった。この時、息子はすでに救急車の中にいたようだった（後日判明）。

私は、息子が暮らしている「いぶきホーム」に行こうとしたが、すでに建物内部に規制線が張られ、いぶきホームには行けなかった。体育館には60名ほどの利用者さんたちが集められ、職員が見守っていた。私は管理棟1階の部屋（普段はグループ活動室）に案内された。部屋には家族会会長、副会長2名、会計の4名がいた。また、長テーブルの上にはA4の用紙4枚があり、利用者さん全員の名前がプリントされていた。用紙1枚ごとに、各課に2ホームずつある利用者さんの名前が記されていたので、息子の所属する4課「いぶきホーム、すばるホーム」の用紙を見た。いぶきホームの欄には、5名の利用者さんの名前の横に○印がつけられ、4名には×印がつけられていた。また、その他の名前の横には、救急搬送された病院名が書かれており、息子の名前の横には「立川災害医療センター」とあった。私はすぐ娘に電話して、立川災害医療センターに連絡するよう頼んだ。そして、管理棟2階の事務室に行こうとして、会議室の前を通ると、そこには「植松」によって命を亡くした利用者さんが何名か横たわっていた。それを見て気分が悪くなり、再び活動室に戻った。娘からかかってきた電話によると、まだ立川災害医療センターに患者さんの乗った救急車は到着していないが、すでに救急車から連絡を受けており、ご家族は至急病院に来てくださいといわれたという。「お父さん、すぐに病院に向かって」と娘はいった。

私が立川災害医療センターに着いたのはAM9:30だった。息子が病院に着いたのがAM9:00頃で、すでに手術が始まっていた。手術は12:30頃終わり、手、首、喉、腹部（腹は大腸が千切れる寸前）だったという。担当医師からは、手術は成功したものの、予断を許さないといわれた何故なら「息子さんの血液型はA型、救急車でO型の血液を輸血している事、又、傷を負っているので感染症が発症するかも知れない」明日の朝まで病院から連絡が無ければ助かったと思って下さいと言われた。翌日、息子は一命を取り留めた。私が初めて息子に面会したのは、事件から3日目の28日だった。集中治療室（ICU）に入っていた息子は、私を見ると、すぐに「お父さん、お父さん、お父さん」と言い続けた。その後も、ずっと病室にいる40分ほどの間、他の言葉は一切言わず、「お父さん、お父さん」と叫び続けていた。この時ほど私は息子を愛おしく思ったことはない。感動して息子を抱きしめ、私も妻も孫も号泣してしまった。息子は立川災害医療センターに23日間入院した後、津久井赤十字病院に転院したが、心が乱れ、パニックを起こし、奇声や自傷行為がしばらく続いた。44日間の入院期間だったが、退院後も心の乱れは収まらず、歩くこともできず、車いす生活が続いた。また、『怖い、怖い』とお腹を押さえる時もあったが、事件から3か月位経ち、次第に心も落ち着きを取り戻し、自力で歩けるようになった。2017年（平成29年）4月に芹が谷園舎（仮住まい）に移って3年が過ぎる頃から、息子は落ち着きを取り戻している。私がマスコミ取材に応じていることもあり、取材の記者さん達に

も愛想を振りまいたりしている。2018年（平成30年）春頃からは、言葉もかなり出るようになり、「お父さん、来週水曜日来る？ おかあさん、来週水曜日来る？」記者の人達にも「お兄さん今度くる？」ときちんと目を見て話すようになったので少しほっとしている。

私自身、息子の本当の幸せは何処に有るのかを考えていて、2017年（平成29年）夏頃から息子の「自立」を考え、関係者の方々に相談、国の「重度訪問介護制度」利用する事に成り、息子の自立を決断、2018年（平成30年）夏には介護士も決まった。息子の自立について順調に進み、2020年（令和2年）8月11日から介護者とのアパート暮らしがスタート、3年半が過ぎ、本人始め、私達夫婦も息子の明るい姿（施設での暮らしとは雲泥の差が有る）を見る事の喜びを感じている。

## 2、当時の、神奈川県、津久井やまゆり園の対応について

私は、事件当日は息子（一矢）の事でパニック状態だったから周りの事はよく判らなかつた。翌日、園に電話をかけ、息子と同じホームの利用者さんの安否を尋ねたら、「個人情報だから教えられない」の返事だった。「私、尾野ですよ、判らないのですか？」「はい、知っています。前みどり会会長の尾野さんです」「私にも教えられないのですか？」「個人情報ですから誰にも教えないようにと、上司から言われています」余りにも、そっけない対応に腹が立ち、息子と同じホーム（いぶきホーム）の家族に連絡しても連絡がつかない状態だった。それぞれ搬送された病院に居たようだ。県や共同会、津久井やまゆり園、更に家族会会長までが、取材拒否をしている。私は憤りが頂点に達し、共同会理事長、常務、事務局長、津久井やまゆり園園長を怒鳴りまくった。「なぜ、教えてくれないのか、利用者さんはみんな家族でしょ、家族の安否を聴くのに、個人情報ですか？おかしくないですか」と私は共同会、園に対して一日も早く家族への「説明会」を開いて現状を伝えてほしいと何度も何度も要望した。事件から11日目の8月6日に初めて家族に「説明会」が開かれ、県の福祉部長、障害福祉課長が謝罪、共同会理事長が経過説明をした。余りにもお粗末な、謝罪会見だった。

## 3、なぜ匿名報道にしなければならなかったのか？

私が事件当日、やまゆり園に着いたのはAM7:30だったが、その時には、すでに匿名報道が決まったあとだった。私はその時、息子のことでパニック状態だったため気が付かなかつた。次の日、家族会役員に確認したところ、当日の朝早く、園に来たご遺族の方（何人かはわかりません）から、匿名報道への要望が出され、園長が津久井警察署に電話して理解を求めたという。しかし、前例がないと警察は、いったんは拒否したものの、その後も再びご遺族から切なる要望が出され、園長、家族会会長が津久井警察署に再度要請した。そして、「**重度の知的障害者施設であることに加え、ご遺族のたつての要望**」ということで、特例で匿名報道を認めることとなった。

これを機に、県や共同会、園、家族会執行部が協議し、全てにおいて取材拒否をする方針になったともいう。それにより、私たち家族に対しても、事件についてまったく公表さ

れなかったばかりか、同じホームで暮らしていた利用者さんの安否を尋ねても、「個人情報だから」という理由で知らせてもらえなかった。私は、この「前代未聞」の報道に納得がいかなかった。「こんな大変な事件について、誰も話さないのはおかしい。誰かが事実を話さなければ」という思いで、私は実名で取材に応じることにした。

**神奈川県警**は、事件発生 1 週間後から、被害者の各自宅に訪れ（犯罪被害者サポート）の資料を渡し、詳しく説明をして頂いた。その説明には、メディアに対する取材拒否についても説明、被害者の方々が望めば、全ての対応は、サポートステーションがお手伝いすると言うものだった。

事件から 4 か月後の 11 月 25 日、県が出した事件検証委員会報告書でも、「**共同会の対応は非常に不適切**」との烙印を押すような報告書となった。私は事件の全容を知るにつれ、本当に津久井やまゆり園だけの責任なのか？ 防犯カメラ設置のアドバイスなど、津久井警察にも責任はないのか？ あるいは、措置入院から退院後の支援体制について、相模原市に責任はなかったのか？ 等々、私は今でも疑問に思っている。まさに、「臭い物にはふたをする」国や、行政のやり方に悲しい怒りがこみ上げる事件になった。

津久井やまゆり園は事件から 2 年が過ぎた頃から、園長が少しずつではあるがメディアの取材に応じるようになった。

#### \* 「匿名報道」についての私の見解

私の意見だが、私は当初、匿名にすべきではないと思っていた。しかし、重度の知的障害がある人たちの家族の大半は、自分の家に重度の知的障害のある人がいることを隠しているように思うし、また、隠したいと思っているようだ。

それは、古くからある「**差別社会**」によるもので、障害のある人たちに対する差別や偏見、ののしり等が、現在も色濃く残っているからだ。（いや、これは、現在も当たり前のように続いている）家族によっては、障害のある子どもがいることで、学校でののしられたり、いじめにあったり、就職や結婚などに支障が出ることを恐れている（過去に事例が何十件と出ている）。確かに、メディアや関係団体などから、「**植松に殺され、家族にも殺された**」「**殺された利用者の人生までも抹殺された**」「**実名を出すべき**」との議論があるが、それはご遺族が考えることであると思う。誰よりもご遺族が一番つらいのだから。第三者の我々が判断することではない、「個人の自由」がある（**個人情報保護法**）なはずなので、時間が過ぎ、ご遺族がメディアなど関係者の前に出て、話す時が来るのを待つべきであると思う。確かに「**知る権利**」を盾にメディアスクラムのような取材に対して、ご遺族や、被害者家族がメディアを嫌っている事は事実だ。どんな事件であっても匿名報道しなくてもいい世の中にならなければいけないと思っている。

この匿名報道については、京都アニメーション殺人放火事件と津久井やまゆり園障害者殺傷事件が議論の対象になったが、二つの事件は本質が違うと思うので別々に議論すべきだと私は思う。

#### 4、事件後の神奈川県、津久井やまゆり園の対応について

当初、私たち利用者の家族は、元の千木良に戻りたかった。そこで、9月の家族会では、みんなの総意として、家族会全員の署名を付けた要望書を、県知事、県議会議長に提出した。それを受けて、県知事は千木良の地に同規模（150名）の建て替えを発表した。また、11月には、再生の青写真と予算案が示され、60～80億円と発表された。しかし、全国の障害者団体（身体、精神）など、知的障害者ではない方々から異論が出され、神奈川県に集結して反対運動が展開された。また、神奈川県に対し、「大規模施設は必要ない。津久井やまゆり園は解体して、グループホームにすべきだ。利用者本人に意思があるのだから、意思を確認した上で住むところを選択させるべきだ」と神奈川県に提言書を提出し、県は見直しを余儀なくされた。翌年2017年（平成29年）1月、見直しの審議委員会が設置された。しかし、1回目から6回目までは建て替えの審議ではなく、意思確認、意思決定支援についての審議だった。そのため、家族会として抗議した後、7回目に初めて、家族会、津久井やまゆり園園長、園職員による説明を要望したが、審議委員会は家族や園を無視し、報告書を知事に提出した。そして10月14日、県は「津久井やまゆり園再生基本構想」を発表した。やまゆり園は、千木良と芹が谷に2分割され、千木良には1ユニット11名（1名は緊急一時、短期入所の部屋）のグループホーム型建物6つと、芹が谷にも同様の建物を建てると発表した。また、取り壊しと建て替えを経て、千木良は、2021年（令和3年）4月、芹が谷は2021年（令和3年）12月以降にそれぞれ開園する運びとなった。

2019年（令和元年）に入り、千木良の取り壊しは終了し、4月にメディアに公開された。2分割される施設の名称については、千木良の施設は現在のまま（津久井やまゆり園）、芹が谷園舎は名称を変更し、新しい名称となる。今後の芹が谷園舎は（芹が谷やまゆり園）となることが決まった。2021年（令和3年）4月、津久井やまゆり園新園舎が完成し、マスコミに公開された。

7月20日には事件から5年の追悼式が県、相模原市、かながわ共同会、合同でしめやかに開催され、6月に完成した慰霊モニュメントで献花した。8月1日から44名の利用者さんが第一陣で入所して生活している。

さかのぼる事4年前、津久井やまゆり園は、2017年（平成29年）秋に、利用者の意思確認を行う「意思決定支援委員会」を設置した。これは、利用者自身がどこで暮らしたいと思っているのか、その意思を確認するための委員会である。津久井やまゆり園の利用者全員に対して、相談支援専門員、利用者担当職員、県職員、行政（各市町村）の利用者担当ケースワーカー、家族による「意思決定支援担当者会議」が随時開催されている（1利用者に対し3～6回以上）。そして、2020年（令和2年）秋までには、利用者全員の意思確認を終了し、2021年春、県が公表した。2019年（令和元年）6月8日県は、津久井やまゆり園再生に向けた説明会を家族会において発表した、その内容は、千木良66名、芹が谷66名という説明だった。

当初、2018年（平成30年）10月14日の（再生基本構想）では千木良は88名、という説明だったが6月8日の説明では、千木良、芹が谷両施設とも同規模の施設にするとの説

明だった。家族からは、意思決定支援担当者会議も終わっていないのに、家族に対して何の説明もなく施設規模を変えるのは、家族を無視しているのか、と怒りの発言も飛び出した。県の弁明は、意思決定支援担当者会議の途中経過を勘案した上、千木良も芹が谷も同規模の施設にすることにより家族に理解して頂けると判断し、令和3年開園に向けて着工する為と説明した。

家族会の人たちも、当初の頃と比べると、神奈川県の説明や、やまゆり園園長の話を聞く機会が増え、当時は家族会も納得の上、一丸となって協力していた。そして、一日も早く、新しいユニット型の施設に入れることを望んでいた。また、地元の千木良の方々も協力的で、芹が谷までボランティア活動に参加してくれるなど、「千木良に戻って来ることを楽しみにしています」と声をかけていただき、本当に感謝している。また、やまゆり園の職員は、事件当時から現在も変わらず、利用者さんに手厚い支援を行っている。意思決定支援担当者会議でも、どうすれば利用者さんが幸せな毎日を過ごせるのかを真剣に考え、取り組んでいる。2022年（令和4年）整備され新しくなった津久井やまゆり園が開園して1年が過ぎ、新園長（共同会生え抜き）の下、活発に活動し、利用者さんも生き生きとした表情で生活している。インターネット、フェイスブック等で発信している。

\*神奈川県は、2019年度（令和元年）予算から、重度障害のある方々が地域移行しやすくなるように、グループホームに対する予算を新設した。重度の障害のある方々を受け入れる法人に対しては、新設、または改修する場合、1施設500万円まで、また、職員配置に対しても、1施設155万円までの補助金を出し、重度障害のある方々を受け入れるグループホームを増やし、やまゆり園の利用者さんらが地域移行しやすくなる取り組みを行っている。県は今後も、この制度を継続すると内外に公表している。

## 5、事件の本質をどうとらえるか？ 死刑囚、「植松」はどんな人間？

この事件は、前述したように、日本古来よりある「差別社会」が引き起こした事件だと考える。この「差別社会」がなくならない限り、これからも色々な形で事件が起きるのではないだろうか。私たち事件の関係者、障害福祉に携わる方々が声を大にして、国や行政に物申していかななくてはならない。そして、事件が風化しないよう語り継いでいかななくてはならない。

\*2018年（平成30年）5月28日には、川崎市の登戸駅近くのスクールバス乗り場で、無差別殺傷事件が起こり、19人の児童が被害に遭われ、うち2名の尊い命が奪われることとなった。さらには、7月18日に起きた京都アニメーション放火殺人事件で35人の尊い命が奪われた。この事件も、津久井やまゆり園無差別殺人事件が発端になっているように思える。

\*「優生思想＝ナチス」と思い込んでいる人は多い。それは、ナチス・ドイツが第二次世界大戦中、障害者やユダヤ人の大虐殺を行ったことによる。しかし、本来、「優生思想」というのは、「弱者が生まれないようにすること」「弱者を作らないようにすること」であり、抹殺することだけを意味するわけではない。

今回の犯人である「植松」も、ナチス・ドイツの間違った思想を心に植え付けられてしまったに相違ない。間違った思想を持つようになった背景には、「植松の家庭環境」があっ

たのではないかと思うし、植松の両親が子育てに失敗したのではないかとも思う。植松の父親は学校教員であり、母親はホラー漫画家という家庭に生まれ、何不自由なく育ちながらも、両親が忙しいことを理由に子どもを放任し、親の愛情を知らずに大人になってしまったからではないだろうか。

私が知る「植松」は津久井やまゆり園に勤務当初、本当に温厚で誰にでも優しい好青年だった、家族会会長時代 2~3 度話したことあり、こんな事件を起こすようには見えなかった。彼が変わったのは勤務して 2 年が過ぎた頃、職員に体の入れ墨を見られ、園側は、緊急会議を開き、協議したと言う。その協議で「入れ墨だけで解雇出来ない、彼は今まで一生懸命支援員として頑張っている」として、継続して勤務してもらう事になった。ただし、「お風呂介助」やプール監視の時はウエットスーツを着る事にしたが、それから態度が急変し、支援している利用者さんの事を非難する言動や、態度が目立ち、指導員職員が注意するとその場は謝罪するが、態度が、改まらないので再度、注意した所「私辞めます」とその日から園に来なかった。(彼はこの前日に衆議院議長あてに「津久井やまゆり園利用者殺害計画書」を出していた)。津久井やまゆり園では、彼が辞めたその日に、相模原市に報告し、相模原市では「北里大学に措置入院」させたが、しかし植松は 12 日で退院し、相模原市はその後の植松の支援を怠った。こうした相模原市のミスにより 5 か月後、植松が事件を起こす事に成った。

事件当初、犯人植松は、あたかも「精神障害者」であるかのようなメディア報道も行われたが、事件の翌年 1 月、検察による「精神鑑定」が 3 か月にわたって行われ、結果「自己愛型パーソナリティ障害」という「人格障害」であると診断された。それにより、刑事責任能力があると判断され、「起訴」されたことは、私たち被害者家族にとっても心が救われる思いがした。

## 6、この裁判で何が裁かれ何が裁かれなくて残っているのか？

2020 年（令和 2 年）1 月 8 日、この事件の初公判が開かれ全 17 回の公判が開かれ 3 月 16 日、死刑判決が下りました。この裁判で私達夫婦は被害者参加制度を利用し全公判に出廷し、裁判を見届けました、私達、関係者には納得のいかない裁判でした、何故なら、検察側も弁護側も、被告の死刑を決める為だけの裁判で、被害者参加の私達（被害者家族）の被告人質問にも質問拒否をし、被告人の、施設利用者を殺害に至る経緯や、被告人の幼少期の生い立ち等、全て質問拒否をされ、ご遺族や、被害者家族には、むなしい、腹の立つ裁判で終わってしまいました。公判 3 日目からやまゆり園職員の供述調書の読み上げが有り、4 日目の供述は、息子の入所して居た（いぶきホーム）の職員だった、その供述の中で、職員が結束バンドで両手を縛られ、職員室のドアノブに繋がれて居た所に息子（一矢）が、自分が刺された部屋から『痛い痛い』と言いながら職員の所へ血を流しながら寄ってきた。職員は「大丈夫、助けに来るから頑張ろうね」と慰め、そして、「一矢さん向こうに携帯が有るから取ってきて」と頼んだ、すると、息子は、痛いのを我慢しながら、携帯を持って来て職員の手へ渡してくれた、そして職員はその携帯で 110 番し、救急体制が早まったと供述した調書が読まれた時、私達夫婦と娘は、傍聴席で抱き合いながら、息子の行動に嬉しくて泣いた。この事を私達家族は、事件から 3 年半、裁判で職員の供述証書

読み上げられるまで、園の職員誰もが知らせてくれなかった事に憤慨した事である。ただ一つ、死刑判決が出て、被告人が控訴せず、3月31日、死刑が確定した事だけが心の救いになりました。今後は、このような悲惨な事件が起きないように、私達家族や、関係者が事件の検証をしっかりと、啓蒙活動していく事が私達の使命だと思います。

## 7、今、私が伝えたい事

私が事有る毎に伝えてきた「日本の差別社会」がこの事件を契機に少しでも軽減されることを願って活動してきた。その始めがメディアの取材に応じる事だった。それは、津久井やまゆり園のあまりにも凄惨な、又、理不尽な殺傷事件で、県や共同会、家族会が匿名報道を理由に、家族にさえ知らされない事に憤りを抑えきれなかったからだ。重度の知的障害者施設の支援員が引き起こしたと言う事で「県や共同会」の保身の為ではないかと。。であれば、施設自体が利用者に対して「差別」しているように思えたからだ。

私は、ご遺族や津久井やまゆり園利用者のご家族が、匿名や取材拒否をしていることを知り、この事件の悲惨さや、重度知的障害の有る人達の現状を世の中の人達に知ってもらって、日本の障害福祉の向上に繋がりたいと思っている。

私が思うメディアの人達は周りの人が言う(しつこい、うるさい、)人達ではない。きちんと礼儀をわきまえた若者たちだ。ただ、当初、他の被害者家族に対してメディアスクラムのような取材合戦があったのは事実だが、私は、当初(4日目のNHKの取材)時からメディアの取材に応じたので、特に感じなかった。何故なら私は、取材に来る記者全員を家に招き、取材に応じたからだ。記者の皆さんが若く、私達夫婦の孫のような感じでどんなことにでも答えた。私達、被害者家族もメディアの方々に対する応対も取材を受ける側として節度の有る応対をすべきだと感じる。そしてメディアの方々には、事実と真実を見極めて報道することを願うばかりだ。

## 8、自立への挑戦

私は、障害のある人もない人も、普通に暮らせる社会であることが当たり前になってほしいと思っている。どんな人間も「命の重さ」は同じはずで、住まいの場が、施設であろうとグループホームであろうと、また、親元での在宅や自立生活によるアパート暮らしであろうと、利用者本人や家族が幸せに過ごせることが一番である。障害が重く、グループホームでの支援が難しい人たちは、施設を選択してもいいのではないかと思う。どこに住むにせよ、家族は利用者が本当に「穏やかに幸せに暮せる」場所を選択できるようにしてあげることが大切だと思う。私は今、息子とともに、自立生活に挑戦し、成功している。

\* 早稲田大学(岡部教授)と、映画監督(宍戸大祐)さんとの出会い



事件が起きて10か月が過ぎた2017年(平成29年)5月27日、津久井やまゆり園事件を考え続ける会の集会在、相模原市で開催され、講師に、早稲田大学岡部教授と私が呼ばれた、質疑応答になり、会場から私に対する集中砲火になり、教授が助け舟を出してくれた。後日、教授からメールが有り、「道草」を撮影中の、宍戸監督を紹介され、宍戸監督が私の自宅に来ました。宍戸さんから、「尾野一矢さんのドキュメンタリー映画を撮らせていただけませんか」と申し出があり、3年間の取材と撮影が行われるようになった。宍戸さんは、津久井やまゆり園に戻るまでを追いかけたいと、私たち家族3人の昼食に何度もお付き合いくださり、撮影していただいた。(宍戸監督の頭の中には私達家族も「道草」に出演を、と考えていたようだ)。

宍戸監督と行動を共にする中で、宍戸監督が、「一矢さんなら、『**重度訪問介護**』の制度を使って、介護者と2人でアパート暮らしができますよ。挑戦してみませんか？」と言われた。私は、「**重度訪問介護**」の制度を知らなかったから、制度の中身を聞かされ、本当に「衝撃」を受けた。私は、常々、障害が有っても健常の方々のように普通に暮らせることが本当の幸せだと考えていたから、宍戸監督と西東京市に有る「**自立生活企画**」という事業所の障害者相談支援専門員の方と会うことになった。また、座間市役所の障害福祉課とも相談するようになった。何度か、「自立生活企画」や座間市役所に相談して行く中で、「一矢の幸せはこれだ」と考え息子の自立に向けて取り組み始めた。

この頃、映画「道草」の撮影も終わり編集に入り、宍戸監督から「尾野さん家族も出演しています宜しく」とのお話が有り、何度か意見交換をさせて頂いた。

2019年(平成31年)2月26日、東京を皮切りに「**道草**」の全国公開が始まり、全国の劇場や、色々な団体の方々が自主上映をして、障害の有る人達やご家族等、又、障害関係者に賞賛されている。

2018年(平成30年)8月からは、今後の一矢の自立生活に向け、介護者が一人決まり、その彼は、私たち夫婦と一緒に毎週水曜日に一矢と昼食を共にしている。そして2020年(令和2年)に入り4月からは介護者の方も3人増え、現在介護者の登録数が15名になった。8月11日から、息子(一矢)のアパート暮らしが始まっている。この選択が親として、息子の幸せの選択肢を増やしてやるのが、私たち夫婦が一矢にしてあげられる精一杯の気持ちだと思って取り組んでいる。

この制度(**重度訪問介護**)を利用している重度の障害の有る人は全国で100人に満たない。神奈川県では私の息子(一矢)が二人目なので、**県障害サービス課**や、**座間市役所**も息子(一矢)の自立を実現させてあげたいと積極的に取り組んでいる。2019年(令和元年)9月4日の(意思決定支援会議)の中で、県には、県独自の「**支給決定に上乗せ支給**」を設定してもらった。又、**座間市役所**と、津久井やまゆり園との話し合いでも**10月**には支給決定が決まり、本格的に息子の自立が実現に向けて動き始め、現在に至っている。

**\* 「**重度訪問介護**」の制度「**障害福祉サービス**」について述べておこう。**

2003年(平成15年)国は、支援費制度を導入、地域移行を打ち出した、それにこれ

までの「措置制度」を契約制度に替えた。と同時に国は国立障害者施設の廃止を打ち出し、これまでの国立コロニーを全て県に任せる形にした。それと県立施設の「指定管理制度」も県に押し付け、民間法人に任せる政策を打ち出した。そして2005年(平成17年)10月施行された「障害者自立支援法」だったが2009年(平成21年)9月民主党政権に代わり、民主党政権下の2012年(平成24年)6月27日公布された法律で(平成24年法律51号)により従来の自立支援法を改正し、現在の「障害者総合支援法」になった。

この法律で「障害者に対する支援の見直し」により「外部サービス利用型」が設定された。これにより「重度訪問介護」及び「地域移行支援」はそれぞれ利用対象が拡大された。それに加え、住まいの場の確保の観点から「共同生活介護(ケアホーム)」は「共同生活援助(グループホーム)」に一元化された。重度訪問介護の制度はこれまでは重度肢体不自由者が対象のサービスだったが、新たに重度の知的障害者及び精神障害者も利用可能になる。

## 9、現在までの息子(一矢)について

2018年(平成30年)8月、介護者(大坪さん)が決まり、毎週水曜日に4人で昼食をするようになり日ごとに大坪さんに懐き始めて、一矢の自立準備を兼ねてファミレスに出かけて食事をするようにした。これまでは、家内が、おにぎりを握り、一矢の好物のウインナーや、コロッケ、ポテトサラダ、フルーツ、チョコレート、等を持って園に行き、天気の良い時は園のグラウンドに折り畳みのテーブルをセットして昼食をしていた。2018年秋ころからマスコミの方々の取材に応じるようになり、息子はどんどん心を開くようになった。

2019年(平成31年)3月26日一矢の46歳の誕生日に、私の家に初めて来た。(私はこれまで35年クリーニング店を営業してきたが体調を崩し、やむなく廃業、小さいアパートに引っ越した)その為私の家に来るのは初めてでした。アパートに入った時はちょっと戸惑いが有ったがすぐに慣れてくれた。(お父さんとお母さんのお家はかしわ台)と教えて「お父さんのおうち、かしわ台、一矢芹が谷にしたの」と健常の人が話すように言ってくれました。我ながら(一矢はすごいな)と思い嬉しくなりました。あれから又、2020年3月25日(一矢47歳誕生会)本来3月26日が誕生日だが私たちの都合で25日、2度目の自宅に来ました。これまでより自宅に居る時間も長くなり順調に自立に向かっているように思われる。

メディアの要望によりファミレスでの食事が増えているが日ごとに健常の人達との会話も増え、笑顔もどんどん出てきました。4年という歳月の中で紆余曲折が有りましたが、息子の幸せの為と思い頑張ってきて報われた事に喜びを感じている。2020年(令和2年)8月11日から、介護者の方と二人でアパート暮らしをエンジョイしている

息子がアパート暮らしで少し困っている事は、時々大声を上げる事です。昨年秋、2階の住人から苦情が「自立生活企画」に来て、昨年6月、居間の天井の防音工事をし、2階の方に謝罪、息子の事を知って頂く為、《かずやしんぶん》を作りご近所や関係者の方々に読んで頂いています。《一矢しんぶん》第9号(24年4月)発行、ご近所の方も遊びに来てくれます。引っ込みじあんになることなく、遠慮せず正々堂々と暮らす事が大事です。昨年からは、介護リーダーの大坪さんがフェイスブックを立ち上げ、事あるごとに投稿し

ています。読んで頂いた方々から、激励の返事がいっぱいです。

### \*映画「道草」について

この映画は、障害者総合支援法の「**重度訪問介護**」という「障害福祉サービス」を使い、重度の知的障害のある人3人が、自立生活をする風景を撮影したドキュメンタリー映画だ。

知的障害のある人にとっての「**自立**」とは、**身体障害者**の自立生活のように、自分一人で自己選択や自己決定を行っていくわけではない。知的障害のある人が、介護者の支援を受けながら、共に考え、共に本人の意思を確かめ合いながら暮らしていく。それが知的障害のある人にとっての「**自立**」であり、そこには人と人が助け合い、支え合う風景がある。

\*宍戸大裕監督は、これまで、東日本大震災で被災した動物たちや人々の姿を描いた「**犬と猫と人間と 2 動物たちの大震災**」や、重度の身体障害で人工呼吸器を使いながら地域で活動している海老原宏美さんらを描いた「**風は生きよという**」、知的障害がある人の入所施設での人生を描いた「**百葉の葉、さやま園の日日**」などの作品がある。

一昨年12月、「風は生きよという」映画の主演者、海老原宏美さんが札幌の病院で治療中でしたが、昨年2月、容体が急変し、天国に召されました。海老原宏美さんのご冥福を、心よりお祈り申し上げます。

「**道草**」は2019年（平成31年）2月26日を皮切りに全国公開されている。是非、この映画を見て頂き、重度の知的障害があっても支えてくれる人が居れば、幸せに暮せる事を理解してほしいと思っている。ちなみにインターネットで「道草」の公式サイトを見る事が出来る。上映してもらえる映画館を募集するとともに自主上映してくれる団体も募集している。昨年2022年、「道草」後編の撮影が始まった。2022年秋には、出来上がったDVDを販売することになり内容は、従来の「道草」本編と、解説付き本編、尾野一矢さんのそれから編、3部作が、1枚のDVDになりました。9月26日、DVD販売が始まりました、販売については、インターネットの「道草公式サイト」から購入できます。

価格は、¥3,000です。本日、会場にても販売致しております。

### 10、親としての思い

私は息子（一矢）の親になり47年、本当に親らしいことをして来たんだろうかと考える日々が続いた時があった。それは、息子の幸せを考えるより、仕事を優先し、息子を施設に預け、それが息子の幸せなのだ、と思い込んでいた自分が居た事である。障害者殺傷事件が息子に降りかかり、そこから、本当の息子の幸せはなんだろうと考え始めた、愚かな父親であったと反省、息子に対して謝罪をする日々でした。一人の人間として、健常の人達と同じように普通に暮せる事が「息子の幸せ」だと確信し、現在に至っている。

### \* 重度知的障害の有る人のご家族へ問いたい。

一つ、自分の家族（障害の有る息子、娘）を心から愛しているか？

自分自身で、息子や娘を卑下していないか、障害の有る人を生んだことを後悔していないか？を今一度自分自身に問いかけてみる事。

二つ、真剣に家族（障害の有る息子や娘）の本当の幸せは何かを考えているか？。

三つ、其の上で親亡き後の事を、障害当事者以外の家族（兄弟、姉妹）と協議しているか？。

これが出来なければ、本当の幸せは「絵に描いた餅」になります。

この事を踏まえ、自分のまわりの理解者に相談、行政のあらゆる制度（介助、介護、助成、給付）等を活用する事、重度知的障害であれば、成人なら「**重度訪問介護制度**」が使えますので、相談支援専門員に相談する事、ただ、この制度を利用するに当たっては、まず、家族が率先して、役所で制度利用の届け、重度知的障害の方を受け入れてくれる事業所探しを相談支援専門員とじっくり時間をかけて相談する事。

どんな障害が有ろうと、一人の人間としての人権が有り、その人の尊厳が守られる権利が有ることを、卑下することなく堂々と伝える事が親としての務めだと肝に銘じる事。